

図書館報

GATEWAY

Vol.63

2025.11

秋を探して、
秋を感じる





BOOK REVIEW

秋の夜長のお供に



『夜に駆ける YOASOBI小説集』

星野舞夜ほか 著
双葉社
913.68/H92

今更ですが、物語を音楽にするプロジェクトが“YOASOBI”。音作りで世界観を表現するセンスと、人間技を超えるボーカルの凄さに、もう曲だけでお腹一杯…かもしれませんが、そう言わず、ストーリーの方もぜひ。共通のテイストは、テンポよく乾いたリズムが生む非現実感。音源を聴きながら読めば、まさに特別な読書体験。一瞬の幻のように過ぎる秋のひと時を体感してみましょう。

アンデルセン童話と聞くと小さな子どものためのお話というイメージが強いかもしれませんが。「雪の女王」「マッチ売りの少女」など、幼いころ触れたお話も、大人になって読むとまた違った景色が見えてきます。今回紹介するのは電子書籍なので、図書館に来なくても読めますし、読み上げ機能で聴くこともできて「ながら読書」OKです。

※電子書籍の利用対象者は、大阪商業大学所属の学部生・大学院生および教職員に限定されています。

『夜ふけに読みたい雪夜の アンデルセン童話』

※電子書籍

ハンス・クリスチャン・アンデルセン 著
吉澤康子、
和爾桃子 編訳
丸善雄松堂
949.73/A46



『図書館のお夜食』

原田ひ香 著
ポプラ社
913.6/H32

「傷つき、疲れ、秘密のある人」たちが働く、夜にしか開いていない図書館が舞台。既に亡くなった作家の蔵書のみ所蔵している。実在の本の内容のご飯が出る食堂が魅力的。なんとなく秋の夜長に読みたくなる？

読書欲と食欲が同時に満たされる1冊です。

図書館が舞台になっている小説を読むと、もっと本が読みたくなる！

奈良と大阪の間を南北にそびえる生駒山。その距離はなんと35km!標高642mの山頂には電波塔が何基も並び、遠くからでも生駒山だと認識ができる。私たちの身近な存在です。この物語は生駒山の山頂にある遊園地の飛行塔が主人公。戦前から戦後にかけて飛行塔の目線で物語は進み、戦争の悲惨さと平和の大切さが伝わります。今年は日本の第二次世界大戦終結から80年、秋の夜長に読んでみませんか。

『100年見つめてきました』

吉野万里子 作、
川上和生 絵
講談社
913.6/Y92



『スミソニアン宇宙大図鑑』



ロジャー・D・
ラウニウス 著、
日暮雅通 訳
河出書房新社
440/L36

星空がきれいな季節、レモン彗星の出現や小惑星の地球大接近、しし座流星群に双子座流星群、星の話題がSNSを賑わしています。

本書は、お家で星空散歩が楽しめる1冊です。写真集として、漠然と星に興味がある人が宇宙物理学に触れる入り口として、しっかりマニアとして、あなたはどのタイプ？ 借りて帰るのが重いという方、館内閲覧で好きなページを何度でも楽しむという方法もあります。

『Eighty-eight views of Mt.Fuji 富士山八十八景』

パイインターナショナル
編著
パイインターナショナル
748/P15



富士山を始めて見たとき、皆さんはどう思われましたか？ 私は、中学の修学旅行で新幹線の車窓から初めて見ました。その時の感動は今でも忘れません。高さはもちろん、裾野の雄大さ、形状の美しさ、想像以上でした。そんな富士山の絶景が堪能できる1冊。秋の夜長にゆっくりページをめくりましょう。キャプションに英語が併記されているので外国人へのプレゼントにもオススメです。



第 11 回大商大プチエッセイ大募集



優秀賞決定

「第 11 回大商大プチエッセイ大募集」の優秀賞が決定しました。

今年度のテーマは、①「本でプラスになったこと」と②「自由テーマ」でした。①では、本がきっかけで自分の進路を大きく変えたことや、普段何気なく使っている言葉も本によって深い気付きがあったことなどを書きつづり、②では、二十歳を目前に控えて生活習慣について考えたことなど自由なテーマで筆を走らせてくれました。テーマ①5点、テーマ②11点、応募総数16点の中から審査により優秀作品を選出しました。募集の当初は6点のところ、今回は優秀な作品が多く以下の7点となりました。受賞者には、賞状と副賞(図書カード)が授与されました。受賞者の皆さま、おめでとうございます。学生ライターとしての館報作りや寄稿にも期待しています。

<優秀賞>

「内なる声に導かれ、『問い』が私を強くする」 公共学科 3 年 佐藤 碧

「上を向いて歩こう」 公共学科 4 年 岩本 哲

「『じゃんから』が繋ぐ故郷と私」 公共学科 3 年 佐藤 碧

「意味」 経営学科 2 年 名雲 紫蘭(ペンネーム)

「感謝の気持ち」 経営学科 4 年 阿部 萌霞

「本を読み、学んだ」 商学科 1 年 渡部 颯太

「二十歳を前に身につけた習慣」 商学科 2 年 関 愛菜



「内なる声に導かれ、『問い』が私を強くする。」

公共学科 3 年 佐藤 碧

私は3月まで、福島高専ビジネスコミュニケーション学科で経営学を専攻し、地域のスポーツがまちづくりや人々の心と与える影響に魅力を感じていました。卒業論文では、リレーションシップマーケティング・サービスマーケティングにおけるスポーツマーケティングを深掘りし、この分野への熱意を募らせていました。しかし、高専4年に進級した頃、「本当にこの道で良いのだろうか」という漠然とした不安が心に影を落とし始めました。

そんな時、図書館で偶然手に取ったのが、苫野一徳と多賀一郎両氏による『問い続ける教師』でした。「自分の“ほんとう”に根ざした問いこそが、学びを動かす」という一節に、私は強い衝撃を受けました。それまでの私は、与えられた課題をただこなすだけで、自分自身の内なる「問い」に真剣に向き合っていなかったことに気づかされたのです。

この気づきは、私の人生を大きく変えるきっかけとなりました。より自分らしい学びを追求するため、私は大学への編入を

決意しました。編入試験に向けては、TOEIC と経営学の学習に集中的に取り組み、語学力と専門知識の双方を徹底的に強化しました。結果的に第一志望の大学には届きませんでしたが、現在、私はスポーツと地域を繋ぐ学びの日々を送っており、深い充実感を味わっています。

本書との出会いは、単なる知識の習得にとどまらない、私の学びの根幹を揺さぶる体験でした。それは、絶えず自分自身に問いを立て続けることの重要性、そしてその問いに真正面から向き合い、自らの答えを深く探求する勇気の尊さを教えてくれました。この教えは、私の進路を決定する上での揺るぎない羅針盤となりました。周囲の期待や社会的な価値観に流されることなく、自分自身の内なる声に耳を傾け、心から納得できる道を選ぶ力を授けてくれました。

この本は、学びの姿勢を根本から変え、未来を切り拓く力をくれました。これからも「問い」と共に学び続けます。

夜遅くの駅前、私はアルバイトを終え、改札の方向へ向かっていた。そこでその体験は起きた。駅前にはスロープがあり、その坂に困っている車いすに乗った女性の方がいた。夜遅くで、終電も近くなっていたため私は「押しましょうか？」と声をかけた。すると女性の方は「郵便ポストを探しているんです」とその女性は言った。その周辺に郵便ポストがあるのかどうか私はわからなかったので近くの駅員さんに聞き、郵便ポストまで車いすを押すことにした。すると女性は「医療従事者の方ですか？」「医療学生の方ですか？」と声をかけてきた。私はどちらにも当てはまらないので「いいえ、違います」と返した。するとその女性は「そうなんです、私は視力も悪く普段から困ることが多いけど、声をかけてくれる人がいないので、医療関係の方かと思いました」と言った。この言葉に私はハッとさせられた。自分自身普段から思いやりを持って生活しているつもりだった。困っていると見て取れる人にはなるべく

声をかけるようには生活しているつもりだった。でも心のどこかでこれくらいなら大丈夫かな、といった自分の中のものさしで勝手にはかっていただけなのだと気づいた。自分自身が思っているよりもその手を求めている人はたくさんいるのだとこの体験から感じた。

いついかなる時もデジタルにのめり込んでしまう、ながらスマホなどは現代社会ならではの問題であると思う。スマホではなく顔を上げて周りを見てみると、その手を求めている人はたくさんいるのだとその女性は私に教えてくれた。



5歳の夏、親戚の新盆で初めて「じゃんがら念仏踊り」を見た。夕暮れの中、白装束の若者たちが太鼓と鉦を打ち鳴らしながら、軒先で故人を送るように舞っていた。高く響く鉦の音と、地面に染み入るような太鼓の重低音が交じり合い、胸の奥にまっすぐ届く。私はその音の波に包まれ、思わず立ち尽くして見入っていた。

じゃんがら念仏踊りは、福島県いわき市に伝わる伝統芸能で、新盆を迎えた家々の前で、太鼓と鉦に合わせて念仏を唱えながら踊り、亡き人の霊を慰める供養の踊りである。江戸時代から続き、地元では「じゃんがら」と親しみを込めて呼ばれ、今も地域の手で大切に守られている。

中学生になると、私は地元の保存会で稽古に通い始めた。最初は太鼓のリズムや踊りの所作を覚えるのに必死だったが、回数を重ねるごとに、動きの背後にある祈りの感覚が少しずつ身体に染み込んでいった。やがて子どもたちに指導を任されるようになり、受け継ぐという行為の意味と

責任を実感した。

中学卒業後、私は地元の高専に進学した。経営学を専門的に学び、勉強に励む日々だったが、どんなに忙しくても、盆の時期には必ず地元に戻った。毎年、じゃんがらの隊列に加わり、太鼓を叩くことで、自分が地域とつながっていることを実感できた。太鼓を叩き終えた後、汗をぬぐいながら招かれる各家庭の縁側で、おにぎりや漬物を囲む時間が、何よりもご褒美だ。震災を乗り越えてきた地域の人々とともに、踊りながら過ごす時間は、私の背筋を自然と伸ばしてくれる。

そして今年4月、私は高専からこの大学に編入した。環境が大きく変わり、新しい日々に戸惑うこともあるが、ふとした瞬間に、太鼓と鉦の音が心の中に響く。迷ったとき、不安になったとき、そのリズムが静かに語りかけてくれる。「大切なものは、静かに、確かに、受け継がれていく」と。伝統を守るとは、自分の根を見失わずに生きること。この音は、これからも私の歩みを導く。

「 意味 」

11 年ほどやっていたピアノをやめた。やめた理由はいくつかあるが、中学受験で忙しくなりピアノを弾く時間が取れなかったのが大きな要因の一つだと思う。そこからずるずると惰性で続け、ついに去年の夏に辞めた。特に未練はなかったが、今までの時間が無駄だったように感じた。コンテストなどにも出場したこともあったが、本番になりピアノの前に座ると、暗譜していた曲が一音残らず吹き飛んだ。それがトラウマになり人前で弾くこともなくなっていた。

大人たちがよく言う、「続けることが大切」みたいな言葉も、結果が出ないと意味はない。私のように惰性で続けていてもまったくもって無意味であり時間の無駄なのだと、11 年かけてようやく気付いた。

しかし、ある日、大学で仲良くなった友人に、駅のストリートピアノで何か弾いてくれと頼まれた。トラウマも克服しておらず、楽譜も調律もろくにされていないピアノでは、恥をかくだけだと

経営学科 2 年 名雲 紫蘭(ペンネーム)

思い断ったのだが、何でもいからと強く懇願され、嫌々ピアノの前に座った。そして、パイレーツオブカリビアンのテーマ曲を右手だけ弾いてやった。嫌な汗が、穴という穴から吹き出してきた。正直に言って、出来はひどいものだった。1 分にも満たない時間なのにもかかわらず、何度も指が絡まり、小学生が人差し指で適当に音を鳴らしたような演奏だった。それでも友人は大きな拍手で褒めてくれた。私は何とも言えない幸福感に包まれた。多分私は、惰性ではあるものの、11 年も続けてきたピアノは無駄じゃないと認めてほしかったのだろう。と、あの時の幸福感の正体を自己分析した。それ以降もピアノには触れていない。今更弾くのもピアノに失礼な気がした。しかし私は、考えを改めることにした。続けたことに意味があるかはまだわからないが、続けなければ、少なくともあの幸福感は味わえなかったのだから。

「 感謝の気持ち 」

小学生の頃、食卓で「いただきます」というとき、その言葉の深い意味を考えることはほとんどありませんでした。食事はおなかを満たす日常の一コマで、食材の背景や物語に思いを巡らせることはありませんでした。しかし、『いのちをいただく』という絵本と出会い、私の心は静かに動きました。この本は、「命と食」をテーマに講演を行う坂本義喜さんの体験談を基にした絵本です。子牛の「みいちゃん」が愛らしく生きる姿や、その命が食卓に並ぶまでの過程を知り、肉や魚が生きていた命だと初めて実感して、子どもながらに命を大切に心が育ち、農家さんや漁師さんの努力に感謝する気持ちが根付きました。

ゼミでは、八尾若ごぼうの農家さんを訪ね、江戸時代から続く伝統野菜の若ごぼうを栽培する農家さんの笑顔に心が温まりました。しかし、少子高齢化により、若ごぼうの栽培から出荷までの技術の継承が難しいということを知りました。

経営学科 4 年 阿部 萌霞

しかし、農家さんの伝統への誇りと愛情に触れ、食材一つ一つに物語がある事を実感しました。この経験から、地産地消やSDGs への関心が芽生えました。今では休日に地元の直売所を訪れ、収穫したてや、形は不揃いでも野菜本来の美味しさを感じられる野菜を買います。漁港でキラキラ輝く魚介類を買います。『いのちをいただく』は、忙しい現代社会で忘れがちな食べ物の背景を思い出させてくれます。インスタ映えを求める世の中で、見た目ばかりが目目されますが、この物語は命を頂くことの大切さや、持続可能な食の在り方を考えるきっかけを教えてくださいました。生き物は他の命を頂いて生き、その命は次のいのちへと繋がります。この自然の流れを受け入れると、生きることへの温かいきもちが生まれます。炊きたてのごはんをみると、食卓が愛おしい時間になります。地産地消を意識することで、地域の環境や経済にも貢献できると気づきました。

初めに言っておくが私は難しい本はあまり読まない。そんな私に、本を1冊読み、内容を要約しろという課題が出された。私が本を真剣に読んだのなんて小学生の頃、かいけつゾロリに熱中した時以来だ。

とりあえず近所の本屋へ行ってみると、本屋大賞受賞作を集めたコーナーに、読みやすそうな本があり、それを読むことにした。退屈で憂鬱な気持ちを抑えながら課題の為と渋々読み始めたが、主人公の行動にワクワクさせられ、読了後には「良かった」と思わず口に出してしまうほど心打たれる読書体験ができた。そんな読書熱冷めやまぬ中、ふと世の読書家たちはこの本に対し、どのような感想を綴っているのだろうと気になってきた。

映画を見た後、喫茶店で語り合いたくなる現象と似たようなものだ。評論サイトを覗いてみると、やはり本屋大賞受賞作とだけあり高評価で、1つ1つコメントに共感してしまう。が、

その中に少し気になってしまうコメントがあった。「所謂、本を読まない層向け」「良くも悪くもミーハー向け」といったコメントだ。指摘も的をついていて確かにと頷いてしまう文章力。そんな文を書ける画面の向こうの誰かは、かなりの読書家に違いないはずだ。つい、私は恥ずかしくなってしまった。自分はコメントに書かれているような、所謂ミーハーなんだと。

その晩、少し考えてみた。その本によって約12年間、封印されてきた私の読書熱が再燃したのだ。その本に少なくとも心を動かされた1人がここにいるのだ。アニメでもファッションでも所謂流行物は軽視されすぎている気がする。私の考える一例だがアニメなら皆が楽しめる作品、ファッションなら着る人を問わず誰でも様になる服。そんな物もいいじゃないか。好きになった本が読書家たちから評価されずとも、私は最高の本と評価したい。好きなものを好きと言うのは全く恥ずかしい事ではないということだ。そんなことを本を読み、学んだ。

「二十歳を前に身につけた習慣」

商学科 2 年 関 愛菜

あと半年で二十歳になる。あと半年でお酒が飲める。子供の頃から憧れていたお酒が、ついに解禁されるのだ。特に私は甘党なので、きっとカクテルや果実酒を飲むだろう。いろんなお酒を飲んでみたい。ところが、夏休み中調べてみると、お酒は太りやすいと知ってしまった。憧れのお酒、楽しみながら飲みたい。そこで、お酒を飲んでも太らないように運動を習慣づけることにした。

最初は筋トレに挑戦してみた。しかし、三日坊主で終わってしまう。そこで楽に続けられる運動を探すことにした。そんな時、叔母がぽつりと「ラジオ体操って真剣にやると痩せるらしいよ」と言った。本当かどうか調べてみると、肩甲骨を回したり、ジャンプをしたりすることで代謝がアップするらしい。しかもたったの3分なので朝のルーティンに取り入れやすい。私はこれだ!と思った。

実際に夏休みの間、毎朝起きてすぐラジオ体操をした。最初は動きを忘れていたので動画を凝視

しながら一生懸命ついていった。普段あまり使っていない筋肉が心地よく伸ばされる。旅行などでできない日もあったが、気づけば40日も続いていた。試しに前屈をしてみると、床に届かなかった手が第二関節までつくようになっていた。さらに毎年、夏休みが終わると1~2kg右肩上がりにになっていた体重が、今年は定規で引いたかのように一直線だった。

ラジオ体操には体型維持や体が柔らかくなる効果があると実感した。夏休みに身につけた「朝起きてすぐのラジオ体操」。この習慣を、

大学が始まってからも、そしてお酒を飲み始めてからも、ずっと続けていきたい。



LSSに聞きました！

秋の夜長は、見る？ 書く？ 遊ぶ？ もちろん読む??

猛暑だった夏が過ぎ去り、やっと過ごしやすい季節になりました。日照時間が短くなり、夜の時間が長く感じられることを“秋の夜長”と言いますね。だいたい9月から11月を指すことが多いですが、厳密には昼と夜の時間がほぼ同じになる秋分の日（9月23日頃）から冬の始まりとされる立冬（11月7日頃）までを指すようです。近頃は、9月はまだ夏の暑さで、10月もまだ30℃に達する日もあったり、11月ぐらいいから秋の気配を感じられるのでは。短い秋の夜長に、LSS（図書館学生スタッフ）はいったい何をして過ごしているのが、聞いてみました。

◆秋の夜長は、ミュージカルの曲を歌いながら料理をして過ごしています。物語の世界に浸りつつ、美味しい料理が出来上がる時間がとてもたのしく、癒しのひとときです。
〈人參太郎〉

◆猛暑も過ぎ去り、過ごしやすい気候の今日の頃、我が家ではあるものが解禁されました。それは、鍋を使う料理です。そして、私は夕食の火の番をすることになります。火にかけた鍋の前で本を読んで過ごすことが多いです。
〈Y,D,〉

◆私は最近、お風呂に入りながら好きな動画を見ることにハマっています。家族全員がお風呂に入り終わった後、気を使わずにのんびり動画を見ながらお風呂に入るとリラックスできて最高です。
〈S,Y,〉

◆私の夜の時間は、2つのことをしています。1つ目は、散歩に行くことです。夜は涼しいので散歩しやすい環境だからです。友達と話しながら2時間くらい歩きます。2つ目は、家族と映画を見ることです。家でみんなで見ると感想を話しながら、とても楽しいです。
〈ゴボウ与兵衛〉

◆秋の夜長にすることは、ドラマを見ることです。週3でアルバイトをしているので、休みの日にストレス発散のためドラマを見て過ごすことが多いです。もちろん、ドラマを見ないで課題をすることもあります。
〈Y,I,〉

◆私は、秋の夜長にジャルジャルを見て過ごしています。ジャルジャルがいないと生きていけません!! 今年はジャルジャルに8回会いに行きます。これを読んだ人でジャルジャルが好きな人がいれば、お友達になりましょう!!
〈JJGS〉



LSS企画展示「就職勝ち組になろう! 資格勉強で大学生活を有意義に」開催中!

就職試験や将来に不安はありませんか？
長期休暇や授業のスキマ時間にコツコツ勉強して他の学生と差を付けませんか？
LSSのメンバーが、図書館2階の資格・就職コーナーから日商簿記やTOEICなどのテキストをセレクトしました。あなたの夢に向かって、今から始めましょう。目指せ、合格!
※全て貸出可
【期間】開催中～2025年12月18日（木）【場所】図書館2階 館内エレベーター横

図書館百景

図書館ならではの景観や物、図書館にこんな所があるという意外な場所や意外な物、などなど…。毎回ご紹介してまいります。

第六回「視聴覚ブースのペアシート」

- 図書館で映画を見たことがありますか？
- 2階メインカウンターを通り過ぎてDVDの棚の裏側に視聴覚コーナーがあります。No.6
- ～20までブースが並び、そのうちNo.17～20がペアシートになっています。映画館のペアシートとはちょっと違いますが、友だちと2人で仲良く同じ映画を見ることが出来ますよ。



学生選書ツアー “本、買いに行こ”

図書館に置く本をあなたが選びませんか？
本屋さんに行って、自分が読みたい本、友だちに薦めたい本、課題や研究に役立つ本などを選ぶことができます。
学生の皆さん、ぜひご参加ください。

<日時>2025年11月27日(木)16:00～18:00

<場所>ジュンク堂書店 難波店

<募集人数>先着15名(本学学生対象)

<申込方法>図書館6階カウンター、または下記メールまで
E-mail: shusho@oucow.daishodai.ac.jp



“推し”自慢も歓迎！本だけじゃない読書会 参加者募集！

本だけでなくマンガや映画・ドラマなどの映像作品OK。そして今回は、あなたの“推し”話も大歓迎！“推し”の“推し”たる所以(ゆえん)、なぜに“推し”なのか、マニアックな「うんちく」などをプレゼンしてみませんか？まだまだミyakミyakを追いつけてる人、よなよな“推し”のお笑いコンビのネタ動画を見て過ごす人…。

持ち時間は、5分。みんなでワイワイ語り合しましょう。

見学のみの参加もOKです。参加者には粗品をプレゼント。

<日時>2025年12月18日(木)16:30～17:30

<場所>リアクト北館 1階 プレゼンテーションエリア

<申し込み、問い合わせ> 図書館6階カウンター



求む！学生ライター



この図書館報『GATEWAY』をつくってみませんか？

1号全紙面まるごとでなくても、読書レビュー1冊、特集記事1本でもOK！チャレンジしてみませんか？

読書レビュー投稿者には「REVIEWER」バッジ、文章を書いた記事投稿者には「WRITER」バッジ、紙面の企画編集者には「EDITOR」バッジを進呈します(写真)。書くことが好きな方、リトルプレスに興味のある方、在学中に何かカタチに残る活動をしたい方、待ってます！

集まれ！LSS！

LSSとは??

Library Student Staff=図書館 学生 スタッフ のこと。
図書館主催イベントの運営サポートと自主活動の特設展示や古本市など、学生にいかにか本を手にとってもらえるか考え取り組んでいます。
あなたもLSSのメンバーになって、あなたが思う“利用したくなる図書館”をつくってみませんか？

※写真は、2025年6月に実施した学生選書ツアーの受付を担当したLSSです。

